

中国トレーサビリティ紀行 —雲南省の旅—



クラシエ薬品株式会社 医薬学術グループ 宇高 一郎

昨今、食に対する安全性が問題視される中、生薬を原料とする漢方薬もトレーサビリティが重要視されています。今回、研究所生薬チームの一行に同行する機会を得ましたので、雲南省で生産される生薬の実情についてレポートします。

雲南省は中国の南西、ミャンマー、ラオスなどと国境を接する辺縁部に位置し、四川省、貴州省、青海省、西藏(チベット)自治区に接している。世界自然遺産に登録される「梅里雪山」(6740m)を擁し、省都・昆明でも標高1900mを超える高原地帯にある。

雲南省といえば、その名前から雲の彼方という印象を持っており、ものすごい田舎をイメージしていたが、羽田から北京を経由して昆明の空港に降り立つと、そこは意外や大きなビルの立ち並ぶ都会であった。しかし、中国を侮ってはいけない。生薬の産地は昆明のような都会にはなく、もっと郡部の奥深い地にあるのだ。昆明を出発した1日目は産地近くのホテルのある町までの移動で終わってしまった。

2日目ようやく産地へ移動する。現地でチャーターしたマイクロバスに揺られ、ホテルを発つ。これから目的の産地へは、500km以上あるという。この距離は日本でいえば東京-大阪間に相当する長さだ。長旅の覚悟を決めて座席を温めていたら、ほどなくバスを降ろされた。なんと途中で飲料水を買いに立ち寄った店の前は駐車禁止区域で、運悪く公安警察に捕まってしまったのだ。急遽タクシーを雇い目的地を目指す。山道に入ると運転を拒否され、結局山の上の生薬畑に向かうのは、地元の生薬集荷業者の4輪駆動車1台のみとなってしまった。ちゃんとした座席に座れたのは5人だけで、残りは荷台にしがみついたの山道運転となった。現地は天候がすぐれず、雨の降りやすい状況で道はぬかるんでおり、「こんなに山を登った先に、果たして畑なんてあるのかいな?」と疑いつつも、現地案内の指示に従うしかない一行であった。

畑は突然出現した。山のなだらかな斜面一帯を切り開き、全体に薬草が植えられていた。いや正確にいうと一面の草むら状になっていて、その草が実は薬草だった、という印象である。植えられていたのは、「木香(もっこう)」であった。

この畑を観察したところ、木香の葉はところどころ

虫食いの穴があいていて、実際にイナゴの類があちこちにしがみついていた。それを捕食しているのであろうカマキリもいた。また種子の収穫時期を過ぎて、花はわずかに点々と残るのみであったが、その花にはコアオハナムグリ(日本で見かけるのと同じ姿かたちであった)という甲虫が取り付いていて、一生懸命花粉を食べていた。これだけ虫が自由に生活できているということは、まず農薬は使われていない畑なのだといっよい。農薬を使わないと生産効率が悪くなりそうだが、安心であることは間違いない。

持ち帰るサンプルとして数株を掘り上げてもらう。管理している農夫は、よく日焼けして健康そうなおじいちゃんである。掘ってもらいながら、生産状況を聞く。現地の集荷業者は雨模様の空を恐れて、早く帰ろうと言うが、そうはいかない。今ここで話を聞いておかないと、次回はいつになるか分からないような所なのである。渋る業者を尻目に、腹をきめてとことん聞き取り、調査シートを埋めていく。この日は聞き取りが長引き、次の調査地を考慮して予約してあったホテルに移動することができなくなってしまった。



前日と同じホテルの部屋に戻ると、昼間に採取した木香のサンプルを乾かす作業を行う。部屋に新聞を敷き広げ、その上に半乾きの土のついた木香の根を広げる。うまく乾かせず、根を腐らせたりすると、成分分析等の生薬学的なデータを取ることができない場合がある。折角のサンプルを台無しにしないために、この乾燥作業は毎晩続くことになる。毎回調査に参加する研究所スタッフの根気強さには頭が下がる。

スケジュールを順調に消化できないことが産地調査の難しい点である。設備の整った都会のホテルに泊まれないと、国際電話もできず、パソコンをもっていたところでネットにも接続できない。「トレーサビリティは楽じゃない」、それが今の私の偽らざる感想である。